中日両言語の重複表現・対比表現・比喩表現について

Concerning Duplication Expression、Comparison Expression
and Figure of Speech in Chinese and Japanese

高橋弥守彦
TAKAHASHI Yasuhiko

内容提要

汉语中常有重复表达、对比表达和比喻表达，而日语中除了比喻表达偶尔使用以外，其他两种表达形式几乎不使用。为什么汉语时常使用的这三种表达形式日语却几乎不用呢？本文从汉日分属“表意文字”和“表音文字”的语言特点出发，通过对两种语言的对比分析，进一步阐明其原因所在。

目次

0. はじめに
1. 対の文化と非対の文化
2. 重複表現
3. 対比表現
4. 比喩表現
5. おわりに

0. はじめに

重複表現“沉默寡言”［黙ったままだ］・対比表現“东张西望”［あちこち見る］・比喩表現“山欢水笑”［山が喜び、水が笑う］[1]は、中国語の特徴の一つである。中国語はこれらの表現が今でもよく使われる。日本語に比べ中国語ではなぜこのような表現がよく使われ発達したのであろうか。それに対し、これらの表現が日本ではなぜあまり普及せず発達しなかったのだろうか。このうちの重複表現は、日本語ではむしろ避けられる傾向にある。

本稿では重複表現・対比表現・比喩表現を調査し、中日両国の発達の違いを分析し、その理由を明らかにする。

1. 対の文化と非対の文化

中国語の代詞は“这”“那”であり、日本語の代名詞は［これ］［それ］［あれ］である。木も“树木”“森林”であり、日本語は「木」「林」「森」である。このような基本的な表現であっても中国語は二項が多く、日本語は三項が多い。中日両国の伝統的な絵画を見ても、夜の景色

---

[1] “山欢水笑”［山が喜び、水が笑う］については、中国語は実質視点からの表現であり、日本語は話題視点からの表現なので、［山が喜び、川が笑う］と訳す方がいいだろう。

であれば、中国はよく満月、日本は三日月[2)]である。また、時代劇では中国は剣を使い、日本では刀[3)]を使う。これらは中日両国の文化を反映し、歴史を反映している。

数字は生活面で非常に重要である。買物などに使う具体的な数字は特に重要である。この具体的な意味を表す数字を基礎にして、自然環境をもとにした『老子』などの思想[4)]により、中日両国の数字文化が長い年月をかけて形成される。一般的に言えば、中国民族は偶数を好み、日本民族は奇数を好む傾向にある。しかし、“一”と“八”[5)]だけは、両国にとっても縁起が良いので、今でも両民族は好んで用いている。

中国民族が偶数を好む理由は「対」からなる自然環境に由来し、日本民族が奇数を好む理由も「非対」からなる自然環境に由来している。これを理論づけたのが陰陽思想である。そのため、数字文化の根底には陰陽思想がある。道観を表すマークは丸のなかに陰陽の二つがあり、神社のマーク（霊魂と言われている）は丸のなかに陰陽とよく似たマークが三つ（日本の神社のマークは一般には三つだが、ごくまれに一つまたは二つの場合もある。）ある。このことからも中国民族の根底には対を意味する“二”があり、日本民族の根底には非対を意味する「三」のあることがうかがえる。

本稿では前者を「対の文化」と名付け、後者を「非対の文化」と名付ける。どちらも自然環境に由来しているが、それを理論付けたのが老荘思想である。ただし、現代人の数に対する音“四”は“死”と同音なので、中日両国の現代人のなかでは、ともに“四”を用いることを避ける傾向にある。中日両国の数字文化は、今でもかなり重要な位置を占めているものの、中日両国における現代の数字文化にはやや変化が生じている、と言える。

中日両国の数字に対する文化は、偶数は「対」となって調和や安定をもたらすという中国民族に対し、偶数は二つに割れるので、両者の「わかれ」を意味し、縁起が悪いとする日本の文化がある。奇数は何かが欠けているので不完全であると考える中国民族に対し、奇数は割り切れないので縁起が良いとする日本の文化がある。中日両民族では、数字文化に対する概念が異なる。しかし、これらはともに自然環境から生まれた文化なので、双方が両国の言語や文化を学習することにより、それぞれの数字文化を理解することが肝要でなる。

---

2) 時代劇の夜の景色には、中国では［満月］がよく出てくるが、日本では［三日月］である。これは両国の文化的特徴を表している。［満月］は円満・団結を意味し、［三日月］はこれから大きくなることを意味する。どちらも縁起ものである。

3) ［剣］は両刃であり、［刀］は片刃である。これは剣が刺すのが主体であり、刀は切るのが主体だからである。刀は少数民族が動物の皮を剥ぐのによく使ったので、片方だけ切れるようにしてある。

4) 高橋弥守彦（2017：p.51～52）では、中日両国の数字文化はいずれも老荘思想から出ているとし、老荘思想に言及している。

5) 高橋弥守彦（2017：p.46～48）では縁起と数字とに言及している。その中で“一”と“八”も紹介している。

この中日両民族の自然環境に由来する数字文化から、両民族の好むリズムが生まれる。中国民族には「四字一句」や「対」を好む傾向が生まれ、さらに四字一句のリズムや対のリズムが生まれる。対のリズムからは絶句や律詩などの定型詩が生まれる。日本民族は「非対」を好む傾向から、俳句・短歌・川柳などの五七五を基本とするリズムが生まれる。これらの数字文化やリズムは、今でも自然環境を重要視する中日両民族の両言語のなかに活かされているばかりではなく、縁起ものである結婚式で包む祝儀のように生き生きと機能している。これらはともに長い伝統に培われているので、お互いに双方の言語と文化を学習し、両民族が交流することにより、誤解を招かない相互交流の一助とする必要があるだろう。

2. 重複表現

重複表現には、意味的な重複と構造的な重複とがある。重複表現は、中国語ではどちらの重複もよく使われるが、日本語ではどちらも避けられる傾向にある。なぜなのだろうか。

2.1. 意味的な重複表現

中国語の意味的な重複表現にはいろいろな構造がある。その代表的な表現は四字語であり、四字成語“沉默寡言”と四字熟語“出差在外”とに大別できる。しかし、四字成語が圧倒的に多い。日本では避けられる傾向にある四字語が、中国ではなぜ発達したのだろうか。

2.1.1. 四字語による意味的な重複表現

四字語による意味的な類義重複は文章中にたくさん使われ、構造も以下に挙げるように多様である。

（１）一路上多多沉默寡言，他知道自己做错了事。（『人民』89－1－99）
歩きながら、多多はだまったままだ。自分が悪いことをしたのを知っていたからだ。（同上）

（２）那次之后，姥姥便再没有提她的绿玉手镯，舅妈伺候姥姥一如从前一样体贴细致，只是姥姥的神态中少了先前那种受之泰然的成份。（『人民』91－1－97）
それからは、祖母は二度と緑玉の腕輪のことを口にしなかった。おばも前と同じように、やさしく、かゆいところまで手の届くような世話をしてくれた。ただ、祖母の表情を見ていると、前にあった「モノがあるからよくしてくれているんだという安心感」が、いくらかでもなくなっていたようだった。（同上）

（３）舅妈对姥姥极好，照顾得周到细致挑不出半点毛病。（『人民』91－1－96）
おばは祖母にとても親切で、少しの欠点もないくらい、キメ細かに面倒見てくれる。（同上）

（４）不过，咱先说点儿眼前的事，别没完没了的，趁早结婚吧。（『人民』94－10－97）
だが、まずは目先の話をしよう。ごちゃごちゃ言わずに、早くカレと結婚することだ。（同上）

（５）但突然有一天，她接到一封电报。说他出差在外，不幸遇车祸。（『人民』96－11－85）

ある日、突然彼女宛に一通の電報が届いた。彼が出張先で交通事故に遭ったというのだ。（同上、96－11－84）

例（1）から（4）はよく使われる四字成語である。四字成語の構造を見ると、品詞にはあまりこだわらないようである。ちなみに、例（1）の“沉默寡言”は「動詞＋動詞」、（2）の“体贴细致”は「動詞＋形容詞」、（3）の“周到细致”は「形容詞＋形容詞」である。（4）の“没完没了”は動詞“完了”を副詞“没”でどちらの語素も否定し、四字成語にしてリズムをよくしている。例（5）の“出差在外”は「動詞＋動詞」の四字熟語ではあるが、リズムをよくするために四字で表現している。四字成語も四字熟語のくみあわせも、単語をくみあわせることにより意味を分かりやすくしリズムをよくしている。これらはいずれも用言性の単語を核としている。以下では、別の構造の四字成語も見てみよう。以下の四字成語は、名詞語素と動詞語素とのくみあわせである。

（6）她变得心灰意冷。（『人民』88－9－97）
彼女はすっかり気落ちしてしまった。（同上）

（7）我心灰意疏，收拾了笔墨纸砚，打算与十年寒窗告别。娘说:“再试一年吧。”（『人民』97－5－87）
すっかり落ち込んだ僕は、勉強道具を片付けて、十年以上にわたった学校生活におさらばしようと思ったのだが、おふくろが「もう一年頑張れ」という。（同上、97－5－86）

（8）一声撕心裂肺的呼唤，“琴——”（『人民』88－9－98）
「琴——」胸も張りさけるばかりの叫びがあがった。（同上）

（9）于是父亲又穿得像模像样，每天按时上下班了。（『人民』94－10－97）
こうして父親は、再び服装をととのえ、毎日時間通りに行き帰りするようになった。（同上、94－10－96）

（10）这可是名贵的花种呢，开了花要上百块一盆，请三托四好不容易弄到的，糟蹋不得。（『人民』89－3－100）
これは名花のタネなんだ、花がひらけば一鉢百元ほどの値打ちがある。それに、あちこち頼んでも、めったに手に入るものではないから、一粒たりともムダにはできなかったのだ。（同上）

例（6）（7）（8）の成語“心灰意冷”“心灰意疏”“撕心裂肺”は、いずれもヒトと関係する語素が使われ四字成語を作っている。（9）の“像模像样”の構造は品詞の違いこそあれ、（4）の構造“没完没了”によく似ている。（10）の“请三托四”は「動詞＋数詞」から作られている。中国語では四字語にするとリズムが良くなるからである。以下では意味的な重複が四字語以外でできている語句を調べてみよう。

2.1.2. 四字語以外の意味的な重複表現

以下の文中に現れた語句の意味的な重複表現は、異なる角度からの四字語以外で作る意味的な重複である。中国語ではなぜこのような意味的な重複表現が好まれるのだろうか。

（11）有次，小洁出差不在家，阿浓邀了几个朋友来家小聚，似乎意在弥补什么。（『人民』94－1－93）

ある日、小潔が出張で家をあけた。阿濃は、なにがしかの埋め合わせにとばかりに、友達を数人よんでささやかな会をもよおした。（同上、94－1－92）

（12）父亲茫然四顾时才发现儿子并未出门，而是坐在他身后看书。（『人民』88－8－100）

父親は力無げにあたりを見まわした。息子は出かけてはいなかったのだ。しかも、彼のうしろで本を読んでいる。（同上）父親が何気なくあたりを見まわすと、息子は自分のうしろで本を読んでいる。（同上）

（13）后来老孙头给自己派了个活，每天早晨四点钟起床，把这条二百多米长的小胡同打扫得干干净净，然后回到院里，再把院子扫净。（『人民』88－5－90）

そのうち、孫老人はやることを自分で決めた。毎朝四時に起き、二百メートルの路地をきれいに掃いたら、庭に戻って中庭を清掃する。（同上）

（14）大约十五六平方米的屋子里，摆一张双人床，一张单人床。一张占地不大的学生桌，桌上放着元元的课本和作业。（『人民』97－2－87）

十五、六平方メートルはあろうかという家の中は、ダブルベッドとシングルベッドが一つずつ、それに小型の勉強机がところせましと置かれ、机の上には息子の元元の教科書とノートが積まれている。（同上、97－2－87）

例（11）の意味的な類義重複“出差不在家”［出張で家をあけた］は、“出差”［出張する］と“不在家”［家にいない］の重複である。同一語句の重複ではなく、異なる語句を用いて作る類義重複である。例（12）の“发现儿子并未出门，而是坐在他身后看书”［息子は出かけてはいなかったのだ。しかも、彼のうしろで本を読んでいる］は、やはり同一語句の重複ではなく、異なる角度から表現する二つの語句“发现儿子并未出门”［息子は出かけてはいなかったのだ］と“而是坐在他身后看书”［しかも、彼のうしろで本を読んでいる］を用いる類義重複である。例（13）の“这条二百多米长”［二百メートル］は、具体的な距離“这条二百多米”とその長さ“长”である。例（14）の“大约十五六平方米”［十五、六平方メートル］は、大まかさを表す副詞“大约”と大まかな広さ“十五六平方米”との組み合わせである。

このような意味的な類義重複は、意味を分かりやすくリズムもよくするので、中国の「対の文化」に支えられ、これからも減ることはないだろう。

2.2. 構造的な虚詞の重複

本節の虚詞による構造的な重複表現は、2 つ以上の出来事の関係を表す虚詞である。同一虚詞は一般的には 2 つか 3 つの場合が多いが、ごくまれに 4 つの場合もある。

（15）她又想不看，又忍不住偷偷地看。（『人民』89－6－100）

見るまいと思っても、ついついおさえ切れずに見てしまう。（同上）

（16）每一声车鸣，带来一串又一串欢快的笑声，涌动着一阵又一阵暖暖的亲情！（『人民』15－1－78）

車（※バス）の到着を告げる音と共に、歓喜の笑い声と暖かな肉親の情がひとつ、またひとつと湧き起こる。（同上）

（17）尽管还没出芽，没长叶，没开花。但一切都会有的。（『人民』89－3－100～101）
まだ芽も、葉っぱも出ていないし、花も咲いていないけれど。それでもみんな出てくるはずだ。（同上、89－3－101）

（18）像候鸟一样，在外的儿女都回到了家乡。无论路途远近，无论寒风細雨，更无论富贵与否。（『人民』15－1－78）
渡り鳥と同じように、外に住む子どもたちはみんなふるさとに戻ってくる。どれほど遠くにいようが、どれほど悪天候であろうが、ましてやお金のあるなしにかかわらず。（同上）

（19）你大了不再崇拜父亲。你越来越沉默，你不再抱怨父亲呆板僵化，不再为各种政治问题与父亲争论不休，也不再说父亲刚愎自用。（『人民』88－8－99～100）
大きくなったら、父親を尊敬することもなくなったし、一層黙り込むようになった。無愛想な、しかめっ面したわしにヘソを曲げることもない。政談を戦わすこともない。親父は強情っ張りで、自信家だとも言わなくなった。（同上、88－8－100）

例（15）から（18）までは、1 つの単語（虚詞）の重複（繰り返し）“又…又…、没…没…、无论…无论…”だが、例（19）は 2 つの単語（虚詞：“不”“再”）を連用して用いる語句の重複“不再…不再…”である。これらの虚詞は 2 つ以上の出来事の意味関係を表し、リズムを整える重要な機能を担っている。たとえば、例（15）は 2 つの異なる気持ち“想不看”“忍不住偷偷地看”を副詞“又…又…”により表している。例（16）の“又…又…”は、出来事が多いことを表している。同一の副詞を重複させることにより、2 つ以上の出来事の関係を見事に表現している。以下の 2 例では、異なる虚詞による 2 つ以上の出来事の意味関係を表している。

（20）只见她先是一楞，接着吃饭的手都有点发颤了，一口饭半天也咽不下去。（『人民』89－6－100）
驚いた鞠さんはそのうち食事をする手も少しふるえ、一口のご飯も、容易にのどを通らなくなった。（同上）

（21）等朋友走后，阿浓又是扫又是拖，还用了吸尘器，折腾了好一阵，才把所有的痕迹清扫干净。（『人民』94－1－93）
彼らが帰ったあと、阿濃はほうきではき、モップで床をふき、掃除機も使った。何度も繰り返したおかげで、部屋はすっかりきれいになった。（同上、94－1－92～93）

例（20）の“先…接着…”と（21）の“又…又…还…”はともに異なる出来事の順番を表し、リズムを整えている。たとえば、例（20）の“先…接着…”は 2 つの出来事“是一楞”［驚いた］、“吃饭的手都有点发颤了”［食事をする手も少しふるえ］を理由として述べ、最後に結論“一

口饭半天也咽不下去”［一口のご飯も、容易にのどを通らなくなった］を述べている。これは具体的な出来事を列挙し、それを統合的に表現する文章表現法の一つ[6]である。

3. 対比表現

対比表現は、一般には一方がよく分からなかったり、両者がよく似ていたりする場合、二つの出来事を対比して両者の特徴や相違点を明らかにする表現方法である。中国語は分かりやすくリズミカルになるので、今でも「対の文化」に支えられ、この表現方法がよく使われるが、日本語はさほど使われない。

3.1. 語素、単語の対比で作る成語

二つの単語で対比表現を作る成語は、二つの単語を対比させることにより、一つの出来事を表す場合である。

(22)一个身材瘦削的男青年正在招牌下伫立着往街道东张西望。(『人民』89－10－101)
やせた若い男がその下にじっと立って通りをあちこち見ている。(同上)

(23) 爹当村干部，整日东奔西跑为公家忙碌得顾及不了家庭，弟妹又小，一家的重担都搁在娘肩上。（『人民』97－5－87）
親父は村の幹部で家は空けっぱなし。弟妹が小さいから一家の重荷が全部おふくろの肩に掛かっているのだ。(同上、97－5－86)

(24) 字，一笔一划，横平竖直，是标准的仿宋体，根本看不出一点个人风格。ウ。(『人民』93－2－111)
字は、筆画がたてよこ真っすぐな、宋朝活字体できっちりしているので、まったく個性が見出せない。(同上、93－2－110)

例（22）の“东张西望”は名詞“东西”と動詞“张望”、例（23）の“东奔西跑”も名詞“东西”と動詞“奔跑”、例（24）の“横平竖直”も名詞“横竖”と形容詞“平直”とである。これらのくみあわせにより、それぞれ一つの出来事を表している。

3.2. 文の対比

以下のように、文（単文・複文）によっても対比表現を作れる。単文や複文の意味を活かして両者を対比させる方法である。

(25) 阿浓怀念没有拖鞋的日子。阿浓也很欣赏有了拖鞋后的家。(『人民』94－1－93)
阿濃は、スリッパがなかった日々をなつかしく思う。そして、スリッパを置くようになってからの家はすばらしい、とも思う。(同上)

(26) 直到她结婚。直到她再嫁。（『人民』96－11－85）
彼女が結婚するまで。彼女が再婚するまで。(同上)

---

[6] 日中国交回復時の田中総理の「多大なご迷惑発言」も日本語独特の統合化表現だけのため、発生した問題であった。これに対し、単語の選択とどのような文構造（「具体＋具体＋統合」「統合＋具体＋具体」）によって書くかが重要な問題となった。

（27）亲爱的爸爸妈妈，我们回来了！亲爱的孩子，爸爸妈妈回来了！（『人民』15－1－78）

お父さん、お母さん、僕たちは帰って来たよ。わが愛しき（※愛する）子どもたちよ、父さん、母さんが帰って来たよ。（同上）

（28）遇到不喜欢的人不喜欢的话就好办了，把结成的冰随意弃置就可以了。爱听的话则可以煮一半，留一半他日细细品味，住在北极的人真是太幸福了。（『人民』15－2－70）

嫌いな人に嫌いなことを言われたら、これは簡単。言葉の氷を適当に捨ててしまえばいい、うれしいことを言われたら半分だけ溶かして、半分はとっておき、別の日にゆっくりと味わう。北極に住んでいる人は、本当に幸せだ。（同上）

例（25）の文“阿浓怀念没有拖鞋的日子。阿浓也很欣赏有了拖鞋后的家”［阿濃は、スリッパがなかった日々をなつかしく思う。そして、スリッパを置くようになってからの家はすばらしい、とも思う］は、主体“阿浓”は同じだが、出来事が異なっている。例（26）（27）の文“直到她结婚。直到她再嫁”［彼女が結婚するまで。彼女が再婚するまで］、“亲爱的爸爸妈妈，我们回来了！亲爱的孩子，爸爸妈妈回来了！”［お父さん、お母さん、僕たちは帰って来たよ。愛する子どもたちよ、父さん、母さんが帰って来たよ］は、主体が異なるが、出来事はよく似ている。この 3 例は、2 項の対比であり、構造も意味も分かりやすく、リズミカルである。

例（28）の“遇到不喜欢的人不喜欢的话就好办了，把结成的冰随意弃置就可以了。爱听的话则可以煮一半，留一半他日细细品味，住在北极的人真是太幸福了”［嫌いな人に嫌いなことを言われたら、これは簡単。言葉の氷を適当に捨ててしまえばいい、うれしいことを言われたら半分だけ溶かして、半分はとっておき、別の日にゆっくりと味わう。北極に住んでいる人は、本当に幸せだ］は、かなり複雑で、対比になっている構造が前者は文“遇到不喜欢的人不喜欢的话就好办了，把结成的冰随意弃置就可以了”で、後者は二つの分文“爱听的话则可以煮一半，留一半他日细细品味”であり、その後の分文“住在北极的人真是太幸福了”に結論が書かれている。例（28）の構造は、外国人にとっては複雑だが、2 項の対比なので構造が分かりやすく、全体的に見れば「具体＋具体＋統合」[7]の伝統的な表現法の一つなので、中国人にとっては受け入れやすい構造と言える。

3.3. 分文の対比

本節は、以下の実例に見られるように、複文中の分文対比である。分文対比にもいろいろな構造があるが、どの構造であっても意味を分かりやすくリズミカルにしている。

（29）弟骑着一辆旧自行车，驮着两袋黄灿灿的小麦，给我送到学校面粉厂。（『人民』97－5－87）

---

[7] 日中国交回復時（1972）の田中角栄の「多大なご迷惑」発言は、この書式ではなく、日本語独特の「統合表現」だけだったので、大きな問題となったのであろう。

弟がオンボロ自転車に粒よりの小麦を二袋も積んで、学校の製粉場に届けてくれた。(同上、97－5－86)

(30) 人生最大的悲哀就是不期望的事儿总是接踵而来，而期望的事儿一辈子都期望不到。(『人民』88－7－101)

人生の最大の悲哀は、期待しないことばかり起きて、期待していることが一生実現しないことだ。(同上)

(31) 化妆最先是为了欺人，之后就成了自欺。(『人民』15－4－70)

化粧はまずは人を欺くためのものだったけど、後には自分をも欺くようになった。(同上)

(32) 我决定委屈儿子了，因为我伴同他的时日还长，我伴同母亲的时日已短。(『人民』15－3－68)

私は息子に我慢してもらうことにした。なぜなら私が彼といられる時間はまだ長いが、母と一緒にいられる時間はもうあまり残されていないからだ。(同上)

(33) 学堂摆在河北岸的山坡上，山上有花有草，河里有鱼有虾，环境很优美。(『人民』94－7－93)

教場が、川の北側の山の斜面にできた。山には花も草もあり、川には魚やえびもいる。(同上、94－7－92)

例(29)の分文対比"弟骑着一辆旧自行车，驮着两袋黄灿灿的小麦"［弟がオンボロ自転車に粒よりの小麦を二袋も積んで］は、主体"弟"は同じで、出来事を対比させている。例(30)の分文対比"人生最大的悲哀就是不期望的事儿总是接踵而来，而期望的事儿一辈子都期望不到"［人生の最大の悲哀は、期待しないことばかり起きて、期待していることが一生実現しないことだ］も、主体"人生最大的悲哀"は同じで、出来事を対比させている。例(31)の分文対比"化妆最先是为了欺人，之后就成了自欺"［化粧はまずは人を欺くためのものだったけど、後には自分をも欺くようになった］も、主体"化妆"は同じで、出来事を対比させている。例(32)の"我伴同他的时日还长，我伴同母亲的时日已短"［私が彼といられる時間はまだ長いが、母と一緒にいられる時間はもうあまり残されていないからだ］も、主体"我"は同じで、出来事を対比させている。例(33)の"山上有花有草，河里有鱼有虾"［山には花も草もあり、川には魚やえびもいる］は分文の主体"山上、河里"も出来事"有花有草、有鱼有虾"も異なるが、二つの分文を対比させている。以下の文はセミコロンを用いる対比である。

(34) 我想找一个两全的办法，找不出；我想拆散一家人，分成两路，各得其所，终不愿意。(『人民』15－3－68)

私はどちらも立てられる方法を考えたが、思いつかなかった。家族を分けて、二つの道を行き、どちらの希望もかなえることも考えたが、結局それは望ましいとは思えなかった。(同上)

(35) 后来发生了分歧：母亲要走大路，大陆平顺；我的儿子要走小路，小路有意思。(『人民』15－3－68)

そのあと、意見が割れた。母は大きな道を歩きたがった。大きな道は歩きやすいからだ。息子は小道を歩きたがった。小道は面白いからだ。（同上）

（36）到了一处，我蹲下来，背起了母亲；妻子也蹲下来，背起了儿子。（『人民』15－3－68）

あるところで、わたしはかがんで母を背負った。妻もかがんで息子を背負った。（同上）

（37）我的母亲虽然高大，然而很瘦，自然不算重；儿子虽然很胖，毕竟幼小，自然也轻：但我和妻子都是慢慢地，稳稳地，走得很仔细，好像我背上的同她背上的加起来，就是整个世界。（『人民』15－3－68）

私の母は大きいけれども、痩せていて、当然それほど重くなかった。息子はまるまるとしていたが、幼かったから当然軽かった。でも私と妻はどちらもゆっくりと、しっかりと、慎重に歩いた。私の背と、彼女の背に負ったものを合わせると、まるで世界丸ごとであるかのように。（同上）

（38）我的母亲老了，她早已习惯听从她强壮的儿子；我的儿子还小，他还习惯听从他高大的父亲；妻子呢，在外边，她总是听我的。（『人民』15－3－68）

母はもう年を取ったので、かなり前から強壮な息子の言うことに従うようになっていた。息子はまだ小さいので、大きな父の言うことを聞いた。妻は、外では私の言うとおりにしている。（同上）

例（34）から（38）まではセミコロンによる対比である。例（34）から（37）まではセミコロンを一つ使うことによりセミコロンの前後の対比を表し、例（38）はセミコロンを二つ使うことによりセミコロンの前後の 3 項目の対比を表している。これらはいずれも対比により意味を分かりやすくリズミカルにしている。

例（34）の“我想找一个两全的办法，找不出；我想拆散一家人，分成两路，各得其所，终不愿意”［私はどちらも立てられる方法を考えたが、思いつかなかった。家族を分けて、二つの道を行き、どちらの希望もかなえることも考えたが、結局それは望ましいとは思えなかった］は、主体“我”は同じだが、出来事“想找一个两全的办法，找不出”“想拆散一家人，分成两路，各得其所，终不愿意”が異なる。例（35）の“母亲要走大路，大陆平顺；我的儿子要走小路，小路有意思”は主体“母亲、我的儿子”も出来事“要走大路，大陆平顺”“要走小路，小路有意思”も異なるが意味的な対比を表している。例（36）の“我蹲下来，背起了母亲；妻子也蹲下来，背起了儿子”［わたしはかがんで母を背負った。妻もかがんで息子を背負った］は、主体“我、妻子”は異なるが、出来事は類似している。例（37）の“我的母亲虽然高大，然而很瘦，自然不算重；儿子虽然很胖，毕竟幼小，自然也轻”［私の母は大きいけれども、痩せていて、当然それほど重くなかった。息子はまるまるとしていたが、幼かったから当然軽かった］も、主体“我的母亲、儿子”は異なるが、出来事は類似している。

例（38）の“我的母亲老了，她早已习惯听从她强壮的儿子；我的儿子还小，他还习惯听从他高大的父亲；妻子呢，在外边，她总是听我的”［母はもう年を取ったので、かなり前から

強壮な息子の言うことに従うようになっていた。息子はまだ小さいので、大きな父の言うことを聞いた。妻は、外では私の言うとおりにしている］は、セミコロンを二つ使っている。主体“我的母亲、我的儿子、妻子”はそれぞれ異なるが、出来事はやはり類似している。

4. 比喩表現

比喩表現とは分かりにくい出来事を分かりやすい出来事に喩えることを言う。本稿では比喩表現を直喩、暗喩の 2 類[8)]に分ける。

4.1. 直喩

中国語の直喩は、“像…、如…、般…、好像…、好似…、似的…、似乎…、犹如…”“像…一样、像…那样、像…似的、好似…似的”“…般、…似的”などの標識を用いて、何かを誰でもがよく知っている何かに喩え、分かりやすく表現する文を言う。

（39）银须飘拂，威风凛凛，像一堵墙挡住了上楼的通道。（『人民』90－4－99）
銀色のひげが揺れて、威風堂々、階段ののぼり口がふさがれてしまったかのようだ。（同上）

（40）乡村的春节，快乐得无邪而纯粹，如田野吹拂而来的那缕春风，清新、自然而又满载一年的希望！（『人民』15－1－78）
ふるさとの春節は無邪気で純粋な楽しみでいっぱいで、田畑を吹き渡る春風のように、新鮮で、自然で、1 年の希望に満ち溢れている。（同上）

（41）有次，小洁出差不在家，阿浓邀了几个朋友来家小聚，似乎意在弥补什么。（『人民』94－1－93）
ある日、小潔が出張で家をあけた。阿濃は、なにがしかの埋め合わせにとばかりに友だちを数人よんでささやかな会をもよおした。（同上、94－1－92）

（42）磨砺内心比油饰外表要难得多，犹如水晶与玻璃得区别。（『人民』15－4－70）
心を磨くことは、外観にペンキを塗ってきれいにするよりも、はるかに難しい。水晶とガラスほどの違いのように。（同上）

例（39）から（42）までは、直喩の標識“像…、如…、似乎…、犹如…”が各分文の先頭にある場合である。これらの単語により、比喩表現の一つの直喩であることを明らかにし、分かりにくい出来事を分かりやすくしている。

（43）她们像亲姐妹一样生活在一起。（『人民』96－11－85）
ふたりは実の姉妹のように仲良く暮らした。（同上）

（44）说完，她像赶小羊羔似地要胖胖上六楼。（『人民』90－4－99）
こういうと、蒋おばさんは子羊でも追うように胖胖を六階へせきたてた。（同上）

---

8) 本稿では比喩表現を比喩標識の有無により、「直喩、暗喩（隠喩）」の二類に分類するが、よく一般には三類「直喩、暗喩、擬人法」や四塁「直喩、暗喩、換喩、提喩」などに分けられている。

(45) 来阿浓家的朋友渐渐少了，阿浓内心好似欠了朋友什么似的。(『人民』94－1－93)
家に来る友達がだんだん減ってきた。阿濃は、彼らに負い目のような気持ちを持つようになった。(同上、94－1－92)

(46) 一霎时，我感到了责任的重大，就像民族英雄在严重关头时那样。(『人民』15－3－68)
瞬間、私は責任の重さに気づいた。民族の英雄が重大な決断を迫られた時のように、である。(同上)

例（43）から（46）までは、文中に直喩の標識を呼応して用いる表現方法“像…一样、像…似地、好似…似的、像…那样”である。これらが直喩であることを明らかにしている。

(47) 冬去春来，她已看熟了那块草地般的绿窗帘。她已不希望它开启了，永远。(『人民』88－9－96)
冬は終わり、春になった。すっかり見慣れた草のように青々としたカーテン、あいてなんか欲しくない、と彼女は思った。永遠に。(同上)

(48) “啊！”紧接着一个银铃般含嗔带娇的声音。“白杜鹃！白杜鹃！可是，太贵了呀。”(『人民』88－9－96)
「あらっ！」続けて、銀の鈴でも鳴らしたような甘えた声が返ってきた。「白のツツジ！白ツツジだわ！でも、高かったんじゃない？」(同上)

(49) 后来，花儿风流过了，便结了果实，绒绒的一个小球，帽子似地顶在头上，好漂亮好漂亮！(『人民』89－3－102)
その後、花盛りは過ぎてしまったが、繊毛の小さなボール状の実をつけた。帽子のように茎の頭にのせて、たいへんきれいだ。(同上)

(50) 但栅栏似的假睫毛圈住的眼波，却暗淡犹疑。(『人民』15－4－70)
しかし柵のようなつけまつげに囲まれた眼は、暗くためらいがちだ。(同上)

例（47）から（50）までは、比喩として用いる名詞の直後に用いて比喩表現であることを明らかにしている。

4.2. 暗喩

直喩の標識である“像…”“像…一样”“…似的”などを使わずに、分かりにくい出来事を誰もがよく知っている分かりやすい出来事に喩える表現である。

(51) 为了鸽子少一声啼哭多一个笑脸加一件新衣，他曾被雷电的金鞭抽下大海，曾被黑鲨的尾鳍砍断肋骨，……鸽子 19 岁了，是条美人鱼呢！（『人民』93－4－111）
鴿子の、一喜一笑、一枚の新しい衣服のために、雷に打たれて海にはねとばされたり、サメの尾ひれであばらを折ったりしたこともあったが……もう十九になり、人魚のように美しい！（同上、93－4－110）

(52) 相爱时他曾写诗说：如果你是牵牛花，我就是一棵树。(『人民』96－11－85)
過ぎし日、彼が「もしきみが朝顔ならば、ぼくは大きな木になろう」という詩を書いてくれたことがあったのだ。(同上、96－11－84)

（53）山欢水笑。（『人民』15－1－78）
山が喜び、水（※川）が笑う。（同上）

（54）风儿吹过，雨儿洒过，霞光染过，终于，抽出了一朵小花，淡黄的，泛着柔嫩的微光，还招来一只蜂儿，嗡嗡地唱着歌。（『人民』89－3－102）
風が吹き、雨にぬれ、霞に染まり、やっと小さな花がひとつ出てきた。淡黄色で、やわらかく淡い光を放っている。それに誘われて飛んで来たハチが一匹、「ブーン、ブーン」と歌を歌っている。（同上）

例（51）は美しく育った“鸽子”を“条美人鱼”に喩えている。例（52）は“你、我”を誰もがよく知る“牵牛花、一棵树”に喩えている。例（53）は山や川の美しさを“山欢水笑”と、擬人法で述べている。例（54）も擬人法“嗡嗡地唱着歌”［「ブーン、ブーン」と歌を歌っている］で表現している。

5. おわりに

中国の「対の文化」や日本の「非対の文化」は、それぞれ自然環境に由来し老荘思想から生まれたものである。対の文化は一字から二字の単語“天地、上下”や四字一句“春夏秋冬、东南西北”のリズムを生み、絶句や律詩のリズムができる。対の文化は、一字一概念からなる漢字を対にすることにより分かりやすくリズミカルにする。中国語の連述文や兼語文に影響を与え、重複表現・対比表現・比喩表現にも影響を与える。非対の文化は五七五を基本とし、俳句、短歌、和歌のリズムとなる。連述文・兼語文および重複表現・対比表現・比喩表現は分かりやすくリズミカルではあるが、冗漫になりやすく、日本語の非対の文化にはあまり馴染まない。そのため、いずれも中国語ほど発達しない。

中国語は SPO 文型が基本であるが、次の 2 例の連述文や上掲の重複表現などは対を基本としており、文構造がかなり異なる。日本語に翻訳するときは、連述文であれば、以下のような工夫が必要である。

（55）我坐飞机去中国。（作例）
飛行機で中国へ行く。（筆者訳）

（56）我去中国学汉语。（作例）
中国へ中国語の勉強に行く。（筆者訳）

中国の重複表現・対比表現・比喩表現は対の文化の影響を受ける。中国語のリズムは対が基本であるが、これらの表現が発達することにより、連語や文のリズムも発達する。意味的・構造的な重複・対比・比喩により、文がリズミカルになる。これらの表現は今後もますます発達するであろう。日本語のリズムは五七五を代表とする俳句であるため、語句の重複を嫌う。日本語にも重複表現・対比表現・比喩表現はあるが中国ほど発達しない。これらの表現は表意文字の中国語では意味を分かりやすくし、文をリズミカルにするが、表音文字の日本語では単語自体が何音節かでできているので、これらの表現を用いて訳すと冗漫になる嫌いがあるからである。

言語資料

1.『人民中国』ショートショート　人民中国雑誌社　1988～1997
2.『人民中国』楽らく対訳　人民中国雑誌社　2014～2017
3.『人民中国』ショートショート　人民中国雑誌社　2018～

参考文献

日本語文献

1. 荒川清秀（2015）『動詞を中心にした中国語文法論集』白帝社
2. 鈴木康之（2000）『日本語学の常識』海山文化研究所
3. ＿＿＿＿（2011）『現代日本語の連語論』日本語文法研究会
4. 朱徳熙著 杉村博文・木村英樹訳（1995）『文法講義』白帝社
5. 高橋弥守彦（2006）『実用詳解中国語文法』郁文堂
6. ＿＿＿＿（2017）『中日対照言語学概論―その発想と表現―』日本僑報社
7. ＿＿＿＿（2020）『中日翻译学的基础与构思―从共生到共创』外语教学与研究出版社
8. 松村達夫（1978）『翻訳の論理　英語から日本語へ』玉川大学出版部
9. 丸尾誠（2014）『現代中国語方向補語の研究』白帝社
10. 李臨定著／宮田一郎訳（1993）『中国語文法概論』光生館

中国語文献

1. 丁崇明（2009）《现代汉语语法教程》北京大学出版社
2. 耿二岭（2010）《汉语语法》北京语言大学出版社
3. 梁鸿雁（2004）《HSK 应试语法》北京大学出版社
4. 卢福波（2011）《对外汉语教学实用语法》北京语言大学出版社
5. 陆庆和（2006）《实用对外汉语教学语法》北京大学出版社
6. 单宝顺（2011）《现代汉语处所宾语研究》中社会科学出版社
7. 徐昌火（2005）《征服 HSK 汉语语法》北京大学出版社
8. 杨德峰（2004）《汉语的结构和句子研究》教育科学出版社